

教師のための著作権講座

教室でどう扱うか 著作権ことはじめ①

「そもそも著作権って何だ？」

独立行政法人日本芸術文化振興会基金部長 大和 淳

はじめに（連載開始に当たって）

ICTが発達・普及し、学校現場でも情報機器を活用した教育活動が広く行われるようになってきました。また、児童・生徒自身で調べる学習活動、それらの学習成果を発表する活動にも積極的に取り組まれるようになってきています。学校におけるこのような活動に当たっては、さまざまな情報が活用され、それらの情報の中には著作物に当たるものも多いと思われます。著作物には著作権があり、ルールにのっとった利用を心掛ける必要がありますが、このルールについて、学校現場ではどのようにとらえられているのでしょうか。

学校における著作権教育の重要性が指摘されるようになって久しいですが、現在の学校における著作権に関する教育の内容や方法としては、どのようなものが望ましいのか、社会的な要請にかなったものとなっているか、現場の悩みは少なくありません。そこで本号から3回にわたり、ある地方都市の中学校に「美術」の非常勤講師として勤務する千代作権太郎（ちよさく・けんたろう）先生と彼を取り巻く教員仲間や生徒とのミニ・ディスカッションの様子を紹介するので、それを通じて、教員が学校において著作権をどう捉えればよいのかについて考えるヒントにいただければ幸いです。

○ 文中に登場する人物名 ○

大和 淳（やまと あつし）

1958年生まれ。文化庁著作権課（指導普及係長、著作権調査官、課長補佐）、文部省高等学校課、浦安市教育委員会、国立教育政策研究所総括研究官等を経て、2014年より現職。

『学校教育と著作権』（（公社）著作権情報センター）、『先生のための入門書 著作権教育の第一歩』（共著）（三省堂）＜本誌14頁参照＞など。



千代作（ちよさく）
美術非常勤講師



副校長
教職25年



喜世育（きよいく）
教務主任



城宝（じょうほう）
技術・家庭担当



江賀楯（えがすき）
生徒

イラスト／齋藤 有紀

著作権は規制なのか

千代作先生が今日の授業を終え、生徒が制作した作品を整理しているところへ、副校長が声をかけてきました。

千代作先生、ご苦労さま。教員採用試験の準備はどう？

少子化の影響で狭き門です。来年度にもう一度チャレンジです。

そうか、頑張ってるね。ところで千代作先生は美術の授業だけではなく、文化祭の企画にも相談に乗ってくれているんだって？

ええ。生徒たちの出し物や、広報などの準備を進めていると、著作権の観点からどうすればいいのかって、担任の先生や教務主任の先生から相談を受けるもので、僕でお役に立てるなと思って。

千代作先生は著作権に詳しいの？

詳しいというほどではありませんが、大学の時に指導教授から二つ以上の得意分野をもてということと、そのうち一つは教科を横断する分野に強くなれということアドバイスをされたので…。福祉とか環境などの課題もこれからの教育に大切だとは思いましたが、私は美術専攻でしたので、美術の制作技法でも情報機器が使われる分野もありましたし、美術には著作権も深く関係すると考えて、情報教育について勉強しました。

なるほど。それで文化祭の準備と著作権とが関係するの？

学校の教育活動では法律上の例外があるので、担任の先生は、生徒たちの活動がそれに該当するのかどうかということを気にされているようですね。

教育活動に関わることであれば多くの場合、著作権の問題はないけれど、法律の条件に引っかかればやっやダメというやつだね。

お言葉ですが副校長先生、それは逆ですよ。作者には自分の作品を勝手に利用さ

れない権利があるけれど、教育目的など特別の条件を満たした場合には、例外的に作者の了解を得ずにその作品を利用できるというのが正しい考え方なんです。

そうなの？でも、学校では自由に使えるのなら、結局は同じことだろう？

学校では自由に使えるという感覚も、一昔前ならそれほど問題にはならなかったかもしれませんが、今のように情報機器が身近になると、拡大解釈が過ぎると言われてしまうんじゃないでしょうか。こういう私もデジタル技術の恩恵を受けて育った世代なので、便利な機器が身近にあって当然という感覚をもっており、偉そうなことは言えませんが。

社会が変化しているんだから、そのような価値観も変わっていいんじゃないのかな。

確かに、技術の進展によって価値が薄れてしまい、淘汰されるものもあるでしょう。例えば、郵便のシステムの確立によって飛脚というビジネスはなくなりましたし、コピー技術の発達によって謄写版はなくなりました。でも配達される手紙やコピーされる文書の価値がなくなったわけではないと思うんです。ものを創造した人へのリスペクトは、美術の教員だけにこだわりが強いのもかもしれません。

なるほど、もっともだ。テレビの受像機のために番組があるわけではないし、インターネットのために音楽や動画があるわけじゃないからね。千代作先生の言う創造した人へのリスペクトは、言い換えれば生徒たちにもオリジナリティを発揮させるということかもしれないね。

そうなんです。でも、校内の先生たちの中には、著作権について話題になると、「学ぶ」という言葉はもともと“真似ぶ（真似をする）”が語源であって、真似を否定する著作権の考え方は教育になじまないんじゃないかなんていう方もおられます。著作権の考え方は決して真似を否定しているわけではなく、先人が創作した文化的な所産を基礎として新しい文化を生み出すインセンティブとしていこうとい